慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中近世スペインの旅人たち： ユダヤ人(ユダヤ教徒)、キリスト教徒、モリスコを例として
Sub Title	Spanish travelers in the medieval and early modern mediterranean world : Jews, Christians, and Moriscos
Author	関, 哲行(Seki, Tetsuyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・3 (2011. 6) ,p.124(222)- 128(226)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：地中海世界の旅人たち：中世から近世へ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中近世スペインの旅人たち
―ユダヤ人（ユダヤ教徒）、キリスト教徒、モリスコを例として―

関　哲行

1．はじめに

大規模かつ安全なヒトの移動という視点から捉えたとき、スペインを含む中近世のヨーロッパ社会は中世中期（一一―一三世紀）以降、とりわけ中世末期（一四―一五世紀）に大きく変容する。中世初期の「半遊牧民社会」では、家畜を伴う疑似血縁集団（部族）単位の移動が優位を占めたのに対し、中世末期になると、従来型の移動の一方で、移動目的が多様化し、余暇や観光を内包した移動も増加する。移動主体も家族、親族、兄弟団、講仲間、商社、ギルドなどに移行していく。

こうした移動形態の変容は、移動のための条件整備と密接にかかわっていた。移動の起点は都市であることから、大規模かつ安全なヒトの移動には、都市的ネットワークと旅人への法的保護、宿泊施設や移動情報の拡充を不可欠とした。陸上・海上交通の整備と航海技術の革新、新たな商業技術（為替手形）の普及に加え、聖化された移動（巡礼や参詣）の浸透も重要であった。巡礼や参詣は移動を信心行とし、移動への内面的抵抗を緩和させたからである。

以下ではトゥデラのベンヤミン、ヒエロニムス・ミュンツァー、モリスコのユーデル・パシャとムハンマド・ブン・ザルクンを例に、中近世スペインのユダヤ人、キリスト教徒、モリスコ（改宗ムスリム）の移動様態について考察したい。

2．トゥデラのベンヤミン

トゥデラのベンヤミン（一一三〇年頃―一一七五年）

はトーラー（モーセ五書）、ユダヤ法、歴史学に通じたラビで、ヘブライ語、アラム語、ラテン語にも堪能なユダヤ知識人であった。敬虔なユダヤ人であったベンヤミンは、一一六五年頃にトゥデラを出発し、約八年をかけてイェルサレムその他の主要聖地を訪れ、ヘブライ語による『旅行の書』を書き残している。『旅行の書』はユダヤ人への「巡礼案内」としての性格を帯びており、ユダヤ教の巡礼の伝統に根ざしたものであった。

もともとユダヤ人は男女を問わず、仮庵祭、過越祭、七週祭の年三回、イェルサレム巡礼を実践し、イェルサレムの神殿に参拝する義務を負っていた。しかし紀元後一―二世紀のユダヤ戦争とその後のディアスポラの中で、イェルサレム巡礼は不可能となり、それは宗教的義務から理想へと軽減された。ベンヤミンのような一部のユダヤ人を除けば、ユダヤ人の多くは、身近な預言者や義人の墓所に参詣することで満足せざるをえなかったのである。

ベンヤミンを聖地巡礼へと突き動かした主要因としては、当時のユダヤ知識人の間に膾炙した終末論とメシア思想が指摘されなければならない。ムラービト朝とムワッヒド朝によるユダヤ人迫害と十字軍国家の成立を背景に、終末とメシア到来が近いとされ、イブン・ガビロールなど一部のユダヤ知識人のパレスティナ巡礼ないし移住を促したのである。ユダヤ人年代記作者アブラハム・イブン・ダウードに至っては、終末の到来を一一八八―八九年と具体的に算定すらしているのであり、終末論やメシア思想が当時のユダヤ知識人にいかに大きな影響を与えたかが推察される。

一一六五年頃にトゥデラを出発したベンヤミンは、ローマ、コンスタンティノープルを経て、念願の聖地イェルサレムに入り、「嘆きの壁」や「シオン山」を訪れる。「シオン山」については、ダヴィデ、ソロモン王の墓廟を破壊しようとしたイェルサレム大司教への奇跡顕現を記述する一方、ヘブロンの「マクペラの洞窟」へのユダヤ人巡礼者にも言及し、ユダヤ教とキリスト教のシンクレティズムを指摘する。終末の予兆とされる「ユダヤの失われた十部族」への関心も高く、偽メシアのダヴィド・エル・ロイ事件の顛末、ニシャプール近郊に残存する「ユダヤの失われた十部族」に触れている。インドや中国の情報も伝えており、胡椒やサトウキビの産地であるマラバール海岸の都市キーロンの「黒いユダヤ人」、北宋の氷結した海域に生息する巨大な鷲グリフィン――異界やオリエンタリズムの表象――に言及する。

3．ヒエロニムス・ミュンツァー

ヒエロニムス・ミュンツァー（一四六〇年頃―一五〇八年）はハプスブルク家ゆかりのチロル地方出身の富裕市民で、パヴィア大学で医学を学んだ後、ニュールンベルクで開業した。神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世と親しい知識人で、マルティン・ベーハイムなどと共に、「ニュールンベルク地理学派」の一翼を担った。

一四九三年三月コロンブスが第一回航海から帰還し、アメリカ「発見」のニュースがヨーロッパ全域に伝えられると、マクシミリアン一世はハプスブルク家のインド貿易やアメリカ貿易への参加可能性を模索すべく、ミュンツァーにイベリア旅行を命じた。ミュンツァーの旅は私的旅行の体裁をとってはいるが、実際にはマクシミリアン一世の要請を受けた外交交渉の旅であった。マドリードの王宮でカトリック両王への拝謁を許された際、マクシミリアン一世の使者と言明していることからも、それを窺い知ることができる。

ミュンツァーは一四九四年八月、ニュールンベルクやアウクスブルクの有力商人の子弟三人と共に、馬でスペイン、ポルトガル旅行に出発した。ミュンツァー一行は、バルセローナ、バレンシア経由で一四九四年一〇月、推薦状を携えて陥落直後のグラナダに入った。グラナダ城代に歓待されたミュンツァー一行は、「地上の楽園」を思わせるアルハンブラ宮殿に感嘆の声を上げる。こうした視線は、現代の観光者のそれと大差はない。その一方で、高度な灌漑技術に支えられた果樹やサトウキビ栽培、モスクとムデハル（キリスト教徒支配下のムスリム）の習俗、グラナダ大司教タラベーラによる改宗運動、マリア崇敬にみられるシンクレティズムなどにも言及する。特に興味深いのはキリスト教徒とムデハルが共有するマリア崇敬で、マリアはファーティマ、アイーシャと並び、「子授け」にご利益のある「聖女」とみなされたのであった。グラン・モスクをカテドラルに転ずるにあたり、カテドラルに聖母マリアが祀られたのも、マリア崇敬の広範な広がりを背景としている。

一四九四年一一月、リスボンに到着したミュンツァー一行は、リスボンの都市景観や特産物に触れる一方で、追放前夜のユダヤ人を目撃する。近接するマグリブ地方も視野に収められ、ポルトガルの領有するマグリブ都市セウタのキリスト教徒は約八〇〇人で、ムスリムからのセウタ防衛には二人のドイツ人騎士が参加したと述べる。

リスボンがインド貿易の中心都市であったことから、香辛料や象牙、金、黒人奴隷などを扱うインド商務院にも関心を寄せ、竜血樹、ワニ、ライオンといったオリエント産の動植物に言及する。ドイツとの関係についていえば、富裕なドイツ人商人がリスボンに居留しており、停泊中のドイツ船で歓迎されたこと、一一四七年のリスボン攻略に参加したドイツ人騎士の墓所が、リスボンの守護聖人である聖ビセンテを祀ったサン・ビセンテ・デ・フォラ修道院にあることが、記述されている。

ミュンツァーのスペイン、ポルトガル旅行を踏まえて、カトリック両王の娘フアナとマクシミリアン一世の息子、ブルゴーニュ公フィリップの結婚が実現する。このフアナとフィリップの息子が、ヨーロッパとアメリカ大陸に跨る広大なスペイン帝国を構築した、カルロス一世（神聖ローマ皇帝カール五世）であった。

4．ユーデル・パシャとムハンマド・ブン・ザルクン

ユーデル・パシャ（一五六〇年頃―一七世紀初頭）はグラナダ地方出身の穏健派モリスコで、第二次アルプハーラス反乱（一五六八―七一年）後にベルベル人海賊に拉致され、宦官としてサード朝のスルターンに仕えた。第二次アルプハーラス反乱を機に、多数のモリスコが強制的もしくは自発的にマグリブ地方に移動しており、ユーデル・パシャとムハンマド・ブン・ザルクンはその典型である。

一五七八年、アフマド・アル・マンスールがサード朝のスルターンとして即位し、オスマン帝国をモデルに政治・軍事改革を断行すると、ユーデル・パシャはマラケシュ総督に任じられた。マンスールはスペイン帝国やオスマン帝国と並ぶ「サード朝帝国」の構築を企図しており、それを実現するにはユーデル・パシャやムハンマド・ブン・ザルクンのような有能なモリスコ官僚の登用に加え、トランス・サハラ貿易（金と黒人奴隷）の独占による財政基盤の拡充が不可欠であった。

一五九〇年、マンスールの命を受けたユーデル・パシャは、約六〇〇〇人の兵士を率い、ニジェール川中流域のソンガイ帝国征服に向かった。遠征軍の中核を構成したのは、火縄銃を装備した約二五〇〇人のモリスコ兵であり、多くの犠牲を伴いながら一三〇日かけてサハラ砂漠を横断し、一五九一年二月トンディビの戦いでソンガイ軍を撃破した。トンディビの戦いに勝利したユーデル・パシャはトンブクトゥを拠点に総督府を設置し、ト

ランス・サハラ貿易の独占を計った。しかしマンスールと対立して罷免され、マラケシュへの帰還を余儀なくされた。

ムハンマド・ブン・ザルクン（？―一五九五年）もグラナダ地方の出身であるが、ユーデル・パシャと異なり急進派モリスコに属し、第二次アルプハーラス反乱に参加して敗れた後、マグリブ地方に亡命した。サード朝の王位継承争いにおいて、マンスールと常に行動を共にしたことから、マンスールの信頼が厚く、フェズ総督に任命された。ユーデル・パシャ罷免の後を受け一五九一年、第二代総督としてマラケシュを出発し、翌年の春にトンブクトゥに入城した。当時トンブクトゥでは、ウラマーに指導された住民反乱が生じていたが、これを鎮圧し、三六〇〇キログラムの金と一二〇〇人の黒人奴隷をマンスールに送付した。こうした強圧策が一因となり、ムハンマド・ブン・ザルクンは一五九五年に殺害された。

一六世紀のスペイン社会にあってグラナダ地方のモリスコは、同化の困難な「他者」として社会の底辺に放置された。第二次アルプハーラス反乱は、それへの異議申し立てに他ならず、同反乱に参加ないし巻き込まれたモリスコが、社会・経済的安定を求め、マグリブ地方に移住したのは当然の成り行きであった。フェズやマラケシュに定住したモリスコの多くは、再改宗して「アンダルス人地区」に集住し、小売商業や手工業などに従事した。モリスコの中にはマグリブ社会に同化できず、スペインへ帰還する者もみられたが、その一方で、スルターンにより総督に任命され、社会的上昇を遂げるモリスコも確認されるのである。

5．結び

中近世スペイン社会は、ヨーロッパ・キリスト教社会の最南端、イスラーム社会の西北端に位置する境域社会であったばかりではない。一五世紀末から一六世紀初頭のユダヤ人追放、ムデハル追放まで、スペイン社会はヨーロッパでもっとも多くのユダヤ人とムスリムを包摂するモザイク社会でもあった。そのためマグリブ地方を含め、言語や宗教、エスニシティーを異にする多様な人々が、中近世のこの境域社会に定住もしくは往来し、差別と偏見を含む多様な価値観を扶植した。近世スペインは他の西ヨーロッパ諸国に先駆けて大航海時代に乗り出し、近代世界システムを稼動させることになるが、それは移動に習熟した境域社会であったことと無縁ではあるまい。